様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３２６７７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2017
課題番号：２４５２０５１０

研究課題名（和文）江戸語・東京語におけるコミュニケーション類型の研究

研究課題名（英文）Study on the type of communication of Edo and Tokyo Language

研究代表者
小川　栄一（OGAWA, EIICHI）

武蔵大学・人文学部・教授

研究者番号：７０１６０７４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本語コミュニケーションの史的変遷を究極の課題として、夏目漱石の小説作品を主たる対象にして、コミュニケーション類型の分類と、ストラテジーを中心にした談話分析を行った。その成果を小川栄一『漱石作品を資料とする談話分析　漱石の文学理論に裏付けられたコミュニケーション類型の考察』（平成29年4月 A4版163ページ）に著した。その結論を述べると、漱石作品における談話の特徴は「不完全なコミュニケーション」であり、これは漱石が『文学論』(1907)で述べる「Ｆ＋ｆ」理論を具体化したものであり、これによって、ユーモアのみならず、人間の心理的な葛藤など、多彩なｆ（情緒）を生み出している。

研究成果の概要（英文）：In this research, I have performed discourse analysis of historic change of Japanese language communication mainly on classification of communication types and analysis of strategy of discourse in novels of Soseki Natsume. I wrote result at a research report "Discourse Analysis of Soseki's Novels and Consideration of Communication Types Based on his Theory of Literature" (April, 2017). The conclusion of this report is that the characteristic of the discourse in the Soseki's novels is incomplete communication. This incomplete communication of Soseki's novels had realized from the "F+f" theory which Soseki stated in "The Literary Criticism" (1907),and brought out various "f" (= feeling) including not only humor but also psychological tangle of human being.

研究分野：日本語学

キーワード：江戸語　東京語　談話分析　コミュニケーション　夏目漱石

１．研究開始当初の背景

従来の日本語史研究では主として音韻、文法、語彙など言語構造の側面が研究されてきた。その一方で運用の側面、特に日常の言語コミュニケーション活動（＝談話）についての歴史的研究はほとんど行われていない。言語の運用面としてコミュニケーションは人間の言語行為であり、その変化は人間や社会の変化と密接にかかわっている。コミュニケーション活動の歴史的研究はこれから発展の期待される領域である。

応募者は以前よりこの問題に強い関心を有しており、下記の図書・論文においても言及してきた。

(1)（図書）『延慶本平家物語の日本語史的研究』(2008 年 2 月 勉誠出版 平成 19 年度研究成果公開促進費による出版)

(2)（論文）「延慶本平家物語に表れた「風評」」（平成 20～23 年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告『長門本平家物語に関する基礎的研究』所収。2012 年 3 月）

(3)（論文）「夏目漱石の小説作品におけるコミュニケーションの類型」（『武蔵大学人文学会雑誌』41-2 2010 年１月）

(4)（論文）「夏目漱石の文体の新しさ」（『日本語学』臨時増刊号（明治書院）2009 年 11 月）

(5)（論文）「夏目漱石作品の談話分析」（『武蔵大学人文学会雑誌』37-3 2006 年１月）

(6)（論文）「和漢融合とコミュニケーションコミュニケーション活動の歴史としての日本語史－」（『武蔵大学人文学会雑誌』34-2 2002 年 11 月）

(1)および(6)は延慶本平家物語を資料にして、その文体「和漢融合文体」が成立した原因を中世におけるコミュニケーション活動（琵琶法師の「平家語り」もその一環と捉えられる）と関連づけて明らかにした。源氏物語など中古仮名文学における語りと比較すれば、平家語りでははるかに多数の聴衆を対象とするために、コンテクストに依存しない、論理的であいまいさの少ない表現が求められた結果、表現機能の進化として平家物語のける和漢融合文体が生じたものと考えた。(2)延慶本平家物語における風評についてコミュニケーションの観点から研究した。

(3)(4)(5)は、中世と同様に著しい社会変化の生じた近世から近代への移行期を目標にすえて、豊富な会話表現を有する漱石作品を対象にした論考である。(3)漱石作品には、不完全なコミュニケーション（話し手の意図が正しく伝わらない会話、話し手と聞き手のいうことがかみあわない会話など）の例が多いことを指摘して、これを細かに分類し、個別に分析・検討を加えた。(4)一般の読者向けに、漱石作品を対象に応募者や先学の行った文体・談話研究の成果を概説したものである。(5)『草枕』における競争的な談話を取り上げて、そのストラテジー（目的達成のための言語使用の方法）を三種に大別して、その内部を下位分類し、詳細な考察を試みた。

以上を背景にして、日本語コミュニケーションの歴史的変遷について、資料の豊富な江戸後期から明治期を中心に研究することを企画した。

２．研究の目的

本研究では談話の歴史的な研究、特に江戸後期江戸語から明治期東京語までの究明を目的とする。さいわい江戸後期には洒落本や滑稽本などの諸作品、明治期には夏目漱石の小説など、日常談話を反映した資料が多いので、研究の可能性は大いにある。江戸・明治期の研究によって現代日本語における談話がどのような歴史的経緯のもとに成立したかが明らかになり、現代日本語を深く理解する上においても重要な意義がある。本研究は、江戸語から東京語にかけてコミュニケーション類型の変化を明らかにし、その背景となる人間・社会の変化との関係を考察する点において全く新しい試みである。さらに、日本語史研究の領域に新たな展開をもたらすことが期待される。

３．研究の方法

本研究では１．(3)(4)(5)において漱石作品を対象に行った方法、すなわち談話の類型、ストラテジーによる談話分析の手法を、江戸語から東京語にわたる口語資料を対象に行う。特に夏目漱石の小説作品を主たる資料とする。 テキストは『漱石全集』（岩波書店 平成 5～6 年）による。これは「原稿等の自筆資料が現存するものについては、できるだけその自筆資料を底本として本文を作成した」（「今次『漱石全集』の本文について」）という方針に従って、「できるだけ」という条件付きながら、漱石の自筆原稿を基にして忠実に再現する姿勢をとっている。『漱石全集』は漱石作品の研究において信頼に足りる資料ということができる。

漱石作品以外に取り上げる資料は、田舎老人多田爺『遊子方言』（1770 頃）など洒落本（江戸遊女語資料）、式亭三馬『浮世風呂』（1809～13）など滑稽本（江戸庶民言語の資料）、明治期の資料として仮名垣魯文『安愚楽鍋』（1871～72）、坪内逍遙『当世書生気質』（1885～86）、二葉亭四迷『浮雲』（1888）、樋口一葉『たけくらべ』（1895～96）、尾崎紅葉『金色夜叉』（1897～1903）、その他合計約 30 編である。

上記の資料により江戸語から東京語への相違と変化相を資料ごとに明らかにし、その原因を社会・文化の変化との関わりから考察する。この結果に基づいて、現代日本語の談話の基本的性格を明らかにする。

４．研究成果

主たる成果は次の研究報告である。

図書①『漱石作品を資料とする談話分析漱石の文学理論に裏付けられたコミュニケ

ーション類型の考察』（全 163 ページ。平成 29 年 4 月）

次は、図書①の刊行後に進めた研究の成果である。

雑誌論文①「漱石作品における演説の談話分析」(『武蔵大学人文学会雑誌』第 49 巻第 3・4 号 平成 30 年 3 月)

図書①を要約する。この章立ては次のとおりである。

第１章　漱石作品研究の意義
第２章　漱石と近代の日本語１ ── 作品における標準語法の採用 ──
第３章　漱石と近代の日本語２ ── 漱石自身の東京語 ──
第４章　漱石と近代の日本語３ ── 書簡文における口語体 ──
第５章　漱石の文学理論と会話の表現
第６章　漱石作品に現れるコミュニケーションの類型
第７章　伝聞のコミュニケーション
第８章　翻弄のコミュニケーション
第９章　解釈のコミュニケーション
第 10 章　「うそ」のコミュニケーション
終章　漱石作品のコミュニケーション類型と文学理論

第１章では研究の意義を述べた。

第２章から第４章までは、漱石と近代の日本語に関する事象について調査した。

第２章では、漱石作品における標準語法の採用について調査した。地の文は口語体を基本とするが、『吾輩は猫である』『草枕』『虞美人草』などをはじめ初期の作品では、文語的な語法や漢文訓読調の文が少なからず含まれているが、『坑夫』以後の作品になると文語的な要素は影を潜めて、口語体が徹底されている。また、会話においても基本的には東京語もしくは標準語を用いている。それでも初期の作品では西日本的な語法が随所に表れているが、これも『坑夫』以後の作品になるとほとんど消失してしまう。このような変化は、漱石が次第に地の文では言文一致を徹底し、会話では標準語に従おうとした結果と見なすことができよう。

第３章では、漱石自身の東京語について、漱石の弟子の一人である森田草平『文章道と漱石先生』（1919）の記述を手がかりにして明らかにした。漱石が作品において東京語を多用する理由については、森田は、作中の人物を生き生きと活躍させようと図ったという見解を述べている。しかし、森田のこの見方は「訛り」「癖」という捉え方とは少し矛盾する。「訛り」「癖」であれば、それは漱石自身の言い方を無意図に用いたことになる。漱石が作中人物を「活躍」させようとしたならば、それは意図的な使用と考えざるをえない。また漱石が「訛り」「癖」の修正に頑として応じなかったということには、漱石の相当に強いこだわりを感じさせる。森田のいう「訛り」「癖」にも江戸語以来の類例をもち、他の作家が用いた例もあるので、決して漱石個人の誤りとはいえず、意図的な使用を予期させるものである。

第４章では、書簡文における口語体について調べた。漱石の作品では『吾輩は猫である』以来一貫して口語を用いていたが、初期の作品中の書簡文では『吾輩は猫である』でも候文を用いるなど、言文一致に対して保守的な傾向があった。『坊っちゃん』以降の作品では口語を採用するようになったが、当初は作品中で登場人物の口を借りて言文一致を「ごたごた」と評するなど、言文一致に伴う冗長性にマイナスの評価をしていた。これは当時一般に言文一致を冗長とする大方の批判に沿うものである。しかし、『それから』以降の作品において、地の文では用いなかったデス・マス調を書簡文に使用して、作品中の書簡における言文一致が定着したことが知られる。特に『行人』や『こころ』ではデス・マス調による長文の手紙が主人公の心理を解き明かすことになって、話しことばに近い文体の書簡が作品の表現において重要な役割を担うこととなった。

これに関連して、漱石の内部においても、作品中に限らず、日常の書簡文の文体についても試行錯誤の過程があった。というのも、漱石は言文一致の書簡に迷いがあったように思える。作品中においても、『それから』の代助などは言文一致を進める姿勢をとっているにもかかわらず、その一方では『明暗』の津田父のように書簡の言文一致に批判的な立場を対峙させている。これは登場人物間の相違でもあるが、これは漱石内部の葛藤ではなかったかとも考えられる。なぜかというに、小宮豊隆との議論でも明からとおり、漱石は言文一致のデアル調を書簡文にはふさわしくないと考えていた。なぜならデアル調には読み手に対する敬語要素がないため、小説の地の文としてはよくても、書簡文としては丁寧さに欠けるからである。むしろデス・マス調の方が書簡文としてはふさわしいのであって、小宮の反論があっても、あえてデス・マス調に固執したのではないかと思われる。その理由は、デス・マス調には候文に匹敵するほどの待遇性があると認めたからであろう。そのために、漱石自身の書簡に、デス・マス調と候文とが同居するなど、複数の文体が同居するような変則的なものが数多く残されている。

このような書簡文における漱石の試行錯誤は日本語の歴史としても重要な意義がある。それというのも、漱石が試行錯誤の末に到達した、書簡文ではデス・マス調、それ以外ではデアル調という書き分けは、そのまま現代における通常の文体になっている。結果として、漱石の方式を多くの日本人が採用したことになる。要するに、デアル調では敬語要素がないために書簡文の文体としてはふさわしくないと多くの日本人が感じている

からであろう。漱石の試行錯誤は書簡文の歴史という観点からも重要な意義があった。

第５章以下は本研究の中心をなす部分で、漱石作品における談話について多方面から考察したものである。

第５章では、漱石の文学理論と会話表現について考察した。漱石作品において主眼とする会話とは、池上嘉彦の「理想的な伝達」に反するコミュニケーション（すなわち「人間的な伝達」のコミュニケーション）である（『記号論への招待』1984）。これはポール・グライスのいう「協調の原理」(『論理と会話』1989）に反する会話でもある。本研究では、これらを「不完全なコミュニケーション」と総称する。漱石の表現技法として不完全なコミュニケーションは重要な意味をもっている。その理由は漱石が『文学論』(1907)で述べる「Ｆ＋ｆ」理論と大いに関係する。漱石によれば、文学とは、認識的要素（Ｆ）と情緒的要素（ｆ）との結合である。漱石初期の作品ではユーモアがｆの主眼であったが、後期の作品になって漱石が文学創作に円熟してくると、人間の心理的な葛藤など、高度なｆを追求するために不完全なコミュニケーションを用いるようになる。

第６章では、漱石作品に現れるコミュニケーションの類型について分析を加えた。漱石作品には様々の類型が展開されている。それだけでなく、筆者はこのようなコミュニケーション類型の活用は漱石作品における重要な表現技法の一つと捉えている。既述のとおり、漱石作品の数ある類型の中でも、不完全なコミュニケーションの存在が重要である。漱石は初期作品においては、不完全なコミュニケーションによる話し手と聞き手のくいちがいについて余裕をもって描いて、それを笑いやユーモアの表現にした。しかし、後期の作品においては不完全なコミュニケーションによって生ずるくいちがいを深刻に受けとめて、それを人間の懊悩、人間相互の対立、人間不信など近代人の深刻な苦悩の表現に用いている。

人間の対立や苦悩にかかわる不完全なコミュニケーションとは、２-３.誤解型、２-４.理解拒否型、２-５.回答拒否型、２-６.発言非難型の型など、聞き手の解釈が不十分であったり、聞き手が理解や回答を拒否するなど、聞き手が話し手に対して会話の進行に非協力的な態度をとったりする場合ということができる。これはグライスの「協調の原理」に違反する場合である。要するに、グライスは会話とは話し手と聞き手との相互協力することが基本的な原理と規定するのであるが、２-３等の類型は話し手と聞き手が協調しない場合である。「協調の原理」に違反することは漱石作品の会話に現れる顕著な特徴である。

第７章では、漱石作品に現れる伝聞表現について考察した。そもそも伝聞情報の内容は曖昧である。情報の曖昧さが与える心理的な効果について、漱石の文学理論ではどのような意義があるか。「うわさ」に関連する法則として、Ｇ.Ｗ.オールポートとＬ.ポストマンの提唱した「うわさの公式」がある（『デマの心理学』1946）。この内容は、「デマの流布量は当事者に対する問題の重要さと、その論題についての証拠のあいまいさとの積に比例する」という。この公式が漱石作品の伝聞情報の表現とどのように関連するか、漱石の理論においてＦに伴う心理的効果ｆがどれほどのものか、それが文学として効果を発しているかについて考察した。そもそもデマというのは人間の社会心理的な現象である。デマの流布量が大きいということは、そのデマが人々の心理に何らかの強い影響を与えているものと考えられる。人々の心理に与える影響が大きいからこそ多くの人の関心事となり、そのデマがますます拡大する。したがって、重要さと曖昧さの積は、デマの流布量に比例してデマに参加する人々の心理にも反映するものと見なされ、漱石のいうｆにもあてはまると考えてよい。

たとえば、『坊っちゃん』のうらなり転任が本人の希望であったかどうかという伝聞情報では、江戸っ子特有の義侠心を持ち、正義や公平さを追い求める坊っちゃんにとって、うらなりが自ら転任をしたのか、強制されたものかには重要な意味があり、強制された転任は許しがたいことである。また、坊っちゃんはこの情報を下宿の老婆から聞いたのであるが、老婆からの伝聞情報には不正確な内容が含まれていることが予想される。このように重要さと曖昧さが積となって坊っちゃんにも大きな心理的な影響をもたらしたものと理解できる。

もちろん漱石が「うわさの公式」から影響を受けたということはありえない。「うわさの公式」が提唱されたのは、オールポート・ポストマンの前掲書（1946）であり、漱石はこのはるか以前の大正５年（1916）に没している。しかし、「うわさの公式」の要素となっている重要さと曖昧さの与える心理的効果については漱石の文学理論からも導き出すことが可能である。なぜかというに、そもそも曖昧とは漱石の所説（『文学論』）でいえば、Ｆが集合的な性格を有して、内部にさまざまな段階の差違を含んで一定しないということを意味する。伝聞に基づく曖昧さの効果は大きいが、これは漱石の文学理論によっても導き出されるものに違いない。漱石もこの効果を企図して伝聞表現を多用しているものと理解される。

第８章では、翻弄のコミュニケーションについて考察した。これは、オースティンのいう「行為遂行的発言」に伴う「発語媒介行為」（『言語と行為』1962)の一種と考えられる。その典型的な例は『行人』に表れる。この作品では、コミュニケーションの相違に伴う意思の不通によってもたらされる人間の孤独や苦悩が描かれている。高校教師の一郎は、

自分の思想なり真実なりを直接に述べようする発言を用いるが、これはオースティンのいう「事実確認的発言」（真か偽かで判断される発言（同前）にあたる。これに対して、一郎の妻お直のとる発言は「翻弄の発言」であって、オースティンのいう「発語媒介行為」に類する。事実確認的発言を行う一郎にとっては、お直の発言を真か偽かで判断しようとすることになるが、発語媒介行為をとるお直にとって発言は相手を動かすためのものであって、発言そのものは真でも偽でもない。事実確認的発言の一郎は、発語媒介行為のお直の発言の意図がつかめず、翻弄されることになる。このように二人のコミュニケーションのタイプが異なる結果、二人の間に意思の不通が生ずる。これが不信感の根本的な原因になっている。

行為遂行的発言や発語媒介行為についてはオースティンが着目し考察する以前には言語学的に認識されてこなかった。漱石はオースティンの認識よりも以前に「翻弄の発言」を文学の表現に用いている。これは漱石が「翻弄の発言」の表現効果をオースティンに先がけて充分認識していたからに他ならない。オースティンに先だって「行為遂行的発言」を作品において活用し、人間相互の相克の描写に用いた漱石の先見性を認識し、評価する。

第９章では、解釈のコミュニケーションについて考察した。「翻弄」と「解釈」「推論」の関連について、「Ｆ＋ｆ」理論に基づいて考える。「翻弄」の発言はオースティンのいう発語媒介行為の一種と考えられ、相手の心理を揺さぶって、話し手に有利な状況を実現しようとするものである。また、「解釈」というのは認識の作用であるが、「解釈」に基づく「推論」を行うことによって、いわば相乗効果となって、とてつもなく大きなＦ（認識）の推移を生ずるものであって、それに応じたｆが発生する。聞き手に深刻な苦悩ｆが発生し、揚げ句は『こころ』の先生のように自殺にまで至る。先生の場合、友人Ｋの自殺に対する自責の念が強く働いたことは想像に難くないが、Ｋが死んでから長い年月を経て先生が自殺に至るというのは常識的に考えれば不自然である。その原因は「解釈」と「推論」によるＦの相乗効果である。年月が過ぎれば過ぎるほど大きなＦの推移を生んで、苦悩が深くなる。そのために先生が自殺に至ったと考えられる。このように、先生の自殺が不自然に感じられないほど無理なく描かれている。

第 10 章では、「うそ」のコミュニケーションについて考察した。漱石作品に現れる「うそ」を概観し、その特質を論じてきた。『坊っちゃん』など初期の作品では「うそ」が規範や正義に対峙するものとして扱われていたが、漱石の作家としての円熟とともに、人間の本質にかかわる表現として進化を遂げたことが知られる。これほどまでに「うそ」にこだわるのは漱石の特質といえる。それというのも、「うそ」とは自己と役割との一致から発生するものであるから（Ｅ・ゴッフマン『行為と演技－日常生活における自己呈示－』1959、井上眞理子「男と女」1982)、「うそ」はさまざまなタイプの人間のありようを役割（社会における役割、男女の役割など）の関係において描くのにきわめて有効である。そして、「うそ」をめぐっては道徳との背反から、吐く方にも吐かれる方にも複雑な心理が発生するという面白さもある。読者にとっても、「うそ」を吐く人物に同調することによって強い興奮やスリルをもたらす。「うそ」が大きな表現効果を伴うことが明らかである。「うそ」を作品の表現として活用することは漱石の卓越した技量と見なすことができる。

終章では、漱石作品のコミュニケーション類型と文学理論について考察した。漱石作品に現れるコミュニケーションの特質は要するに「不完全なコミュニケーション」である。なぜ漱石が「不完全なコミュニケーション」を用いるかといえば、これからは多彩なｆが生み出されるからである。漱石の小説作品は一作ごとに違ったテーマ、違った作風をもっている。概して、前半の作品（吾輩は猫である、坊っちゃん、草枕）などはユーモアにあふれ、後半になるほど人間の苦悩を描く作品（行人、こころ）が増えてくる。多彩なコミュニケーションを自由自在に操って、ユーモアから人間の悩み・葛藤までを描いたことに漱石文学の特色があると考える。作品により作風は違っても根幹にあるのは「Ｆ＋ｆ」理論であり、この理論に裏打ちされたコミュニケーションの表現である。すなわち、前半の作品ではコミュニケーションがかみ合わないことをユーモアの表現に応用し、後半の作品ではコミュニケーションの不全（事実確認的発言と行為遂行的発言・発語媒介行為）を人間の苦悩、夫婦の対立を描く技法として応用した。「不完全なコミュニケーション」からは多彩なｆが生み出されるのだが、これこそ漱石作品の特徴であるとともに、漱石の創作力といえるであろう。ちなみに「不完全なコミュニケーション」が文学において特徴的であることは記号論の観点から池上嘉彦がすでに指摘している。ただし、池上の論ではなぜ「不完全なコミュニケーション」が文学的かの理由が充分に説明されているとはいいにくい。しかし、漱石の「Ｆ＋ｆ」理論に基づいて考えれば、「不完全なコミュニケーション」が多彩なｆを生み出すこと、これが文学的になる理由である。

「Ｆ＋ｆ」理論と現実のコミュニケーションとはどのように関係するか。もちろん「Ｆ＋ｆ」理論とはあくまでも文学の理論である。「Ｆ＋ｆ」理論を背景にした会話といっても、それは文学作品におけるものであって、一般的な見方をすれば通常の会話とは区別して考えるのが当然かもしれない。通常のコミュ

ニケーションとは情報伝達を主眼とする、池上のいう理想的な伝達にあたるものである。ｆを重要視する「Ｆ＋ｆ」のコミュニケーションとは、文学という虚構の世界において有効な考えと考えるのが常識的かもしれない。しかし、ｆの多少はあるにしても日常の会話においてｆのないもの、単なる情報の伝達を行うコミュニケーションはやはり味気ないものである。通常のコミュニケーションにおいてもいくぶんかのｆ（喜怒哀楽等の感情的な要素）が含まれることが多い。文学と通常のコミュニケーションの違いとはｆの有無というよりも、ｆの多少と考えるべきであろう。したがって、「Ｆ＋ｆ」理論は日常のコミュニケーションにも応用可能なものと考えられる。

それというのも、コミュニケーションには情報伝達と共感性という二つの要素がある。情報伝達とは認識にかかわるものであるから漱石のＦにあたる。共感性とは情緒にかかわるものであるから漱石のｆにあたる。このようにあてはめれば、漱石の「Ｆ＋ｆ」理論はそのままコミュニケーションの原理にもなる。Ｆに重点をおくものは日常会話、ｆに重点をおくのは文学の会話というように構造化することもできるのではないか。このように考えれば、漱石の「Ｆ＋ｆ」理論はコミュニケーションにもあてはまる汎用性の高い理論ということができる。

この「Ｆ＋ｆ」理論は文学一般にあてはまるものであるから、漱石以外の作家においても適用されるはずである。このような予測は立つものの、筆者は現時点で他の作家の作品を詳しく調査していないので今後の課題とする。しかし、「Ｆ＋ｆ」理論が汎用的なものであると見なせば、それでは漱石作品の特徴が薄れてしまうことにもなるかもしれない。これについては次のような見通しをもって考える。漱石はそのための著書『文学論』を苦労して著しているだけあって、Ｆ（認識）とｆ（情緒）に関する表現が作品の中で徹底して行われているように思える。他の作家は必ずしも「Ｆ＋ｆ」理論を明確に意識していないし、漱石ほど徹底していないようにも思われる。漱石以外の作家の作品の会話についてはその作家の思想なり作風なりに即した分析方法が必要になるであろう。いずれにせよ、「Ｆ＋ｆ」理論の徹底的な活用こそ漱石作品の特徴といえることは疑いない。

雑誌論文①は図書①の完成後に行った研究の成果である。漱石の小説作品に表れた演説（speech）を取り上げて、当時の日本における演説の状況（日本における演説の草創期）をも視野に入れながら、漱石の文学理論および談話分析の観点から考察した。漱石作品の演説は次の４タイプに分類される。『吾輩は猫である』の演説（漱石の文学理論に基づく演説）、『坊っちゃん』の演説（詭弁と含意の演説）、『野分』の演説（聴衆の反応をねらう演説）、『三四郎』の演説（漱石の文学観を述べた演説）。漱石作品にはこのようなタイプの演説があるが、基本的に漱石の「Ｆ＋ｆ」理論に基づいて創作されたものである。漱石作品中の演説は、漱石自身の行った演説と比較しても、聴衆の感情に強く訴え、かつ緊張感にあふれている。同時に内容における真実性をも追求しており、真実のＦとｆとの両者があいまったものとなっている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

①小川栄一、漱石作品における演説の談話分析、武蔵大学人文学会雑誌、査読無、Vol.49、No.3・4、2018、pp.1-29

②小川栄一、漱石作品における「翻弄の発言」、武蔵大学人文学会雑誌、査読無、Vol.48、No.2、2017、pp.486-471

③小川栄一、漱石作品における伝聞表現について、武蔵大学人文学会雑誌、査読無、Vol.47、No.3・4、2016、pp.1-29

④小川栄一、夏目漱石の小説作品における「訛り」について　――森田草平『文章道と漱石先生』を手がかりにして――、武蔵大学人文学会雑誌、査読無、Vol.46、No.3・4、2015、 pp.462-431

⑤小川栄一、夏目漱石作品における「うそ」の談話分析、武蔵大学人文学会雑誌、査読無、Vol.45、No.3・4号、2014、pp.1-31

⑥小川栄一、洒落本における会話のストラテジー――山東京伝『傾城買四十八手』を資料にして――、武蔵大学人文学会雑誌、査読無、Vol.44、No.4、2013、pp.304-275

〔学会発表〕（計０ 件）

〔図書〕（計 １件）

①小川栄一、漱石作品を資料とする談話分析漱石の文学理論に裏付けられたコミュニケーション類型の考察（科学研究費研究成果報告）、2017、163

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

ホームページ等　なし。

６．研究組織

(1)研究代表者

小川　栄一（OGAWA, Eiichi）

武蔵大学・人文学部・教授

研究者番号：７０１６０７４４